



ダイアナさんとウエストミンスター大修道院

鳥巢義文

昨年の夏の終わりに、ダイアナさんの国葬がロンドンのウエストミンスター大修道院において執り行われた。私は故人の冥福を祈りつつも、テレビ中継の画面に映し出された大修道院の美しさに心を奪われていた。その映像は、通常、人の目の高さでは見る事のできない角度から聖堂内部を紹介してくれていた。実は、彼女の不幸な事故死の10日程前、私は目前に放映されている教会堂の中にいたのであった。ロンドンにしては暑い晩夏の数日だった。

Abbeyを「寺院」と翻訳するのに慣れ、ウエストミンスター寺院と呼び慣わす我々の耳には「大修道院」という表現は馴染みが薄い。しかし、16世紀半ばまで、そこはカトリックのベネディクト会大修道院として機能していたのであり、ダイアナさんの死を痛み、追悼の歌を唱和する人々が立っている聖歌隊席には、かつて、日々の祈禱のために修道士たちが集っていた。

宗教改革の時代、1540年に大修道院は明け渡され、新体制のウエストミンスター大聖堂となった。更に1560年、同聖堂はエリザベス一世によって聖堂参事会管轄の教会とされたがAbbey(大修道院)の呼称は残された。英国君主の戴冠式はここで執り行われる。だが、ここはいわゆる主教座聖堂ではない。ちなみにロンドンの主教座聖堂は聖ポール大聖堂である。これは、ダイアナさんが結婚式を挙げた教会であるといった方が分かりやすい。また、大修道院の近所には同じくウエストミンスターと名付けられる大聖堂(Cathedral)があるが、これはカトリックの司教座聖堂である。

一教会堂となった大修道院内部には、この建物の創設者で懺悔王とも呼ばれるエドワード王(1066年没)の礼拝堂を始めとして、歴代の王と王妃の礼拝堂や墓、また政治家、科学者、音楽家そして詩人や作家などの墓や記念碑、更に第一次世界大戦で亡くなった無名戦士の墓などがある。その数は3500とも言われている。「カンタベリー物語」で著名なジェフリー・チョーサーの墓もここにある。

今日の英国国教会の中心的教会堂はロンドンにはない。それはロンドンから列車で1時間40分程東へ離れたカンタベリーにある。6世紀にグレゴリウス一世教皇から遣わされたベネディクト会士アウグスティヌスの宣教の結果、そこには大聖堂が建築された。トーマス・ベケットは12世紀にカンタベリーの大司教であったが、不幸にも暗殺された。彼の墓に巡礼する人々は今日でも後を絶たず、私がそこを訪れた日、午後の礼拝中になされた説教でもこのことが言及された。大聖堂外壁の一角ではベケット展が開かれていた。周知の通り、チョーサーの物語はこの墓参に関わっている。

英国教会史と深く結びつくウエストミンスター大修道院。国会議事堂に近く位置し、大都市の喧騒の中に建つ大教会堂である。しかし、その中に一步脚を踏みいれると、祈りの静寂が支配している。それは、おそらく1000年近くの間、いつの時代にも保たれた静けさであろう。暑い晩夏の午後、安らぎさえ与えてくれるこのひんやりとした雰囲気には、ちょうど、人々の心の叫びにじっと耳を傾けてきた神の、人の心を見通す冷静なしかし優しい眼差しを感じることができる。ダイアナさんの短い生涯もここで閉じた。冥福を祈る。

大修道院を出ると左手に売店がある。中高生向きにきれいにレイアウトされた修道院に関する本(Tony McAleavy, Life in a medieval abbey, English Heritage, 1996.)を見つけた。英国における修道生活の歴史がまとめられていて、肩の凝らない読み物である。

(Yoshifumi TORISU:文学部助教授)

「カトリック文庫」雑感

前南山学園事務局長 山本勇郎

図書館で カトリック図書資料を特に収集したい、と聞いたのは10年位前であったろうか。その時に感じたこと、また今も感じ続けていることを書かせて戴きたいと思う。

最初に感じたことは、「遅かったかな」であった。既に上智大学では聖三木パウロ文庫が在り、純心女子短大でもかなりの資料収集がされており、カトリックではないが天理大学図書館でも凄い収集努力をされていることなどを知っていたからである。「遅かった」感じのもう一つの理由は、1962年から64年にかけて行われた第二ヴァチカン公会議を経てカトリック教会の大きな改革があり、使われなくなった書籍特に変更の大きかった典礼書などはかなり処分されてしまっていることを知っていたからでもある。

第二番目に感じたのは「大変だな」であった。というのは、特別な予算も人員も割けないことは分かっていたし、その対象は膨大であることもある程度は理解していたからである。

神学、文献学、図書館学などの知識不足の修道士に過ぎないが、この収集分野についての「大変」な理由を以下に二、三述べさせてもらおうと思う。

1. 聖書及びその注釈書

キリスト教文献について先ず挙げねばならないのは、聖書であるが、聖書については多言を要しない。古くは始源不明の伝承に基づく旧約の切れ端から、しばらく前に発見された死海文書まで対象期間が長く、原文はアラマイ語、ヘブライ語、ギリシャ語であり、主な訳文だけでも、70人訳、ヴルガタ訳のラテン語を始め、現代では180カ国語にも訳されている。また、その注釈書に至っては既に古典となっている教父時代の文書、中世紀の教会博士たちの著作、宗教改革時代の啓蒙書などなどから現代まで、考古学、人類学の発展と時を同じくして数多く出版されている。

我が国に限ってみても、「はじめに賢いものござる。」の音次郎訳からの九州を中心とする自己出版のキリシタン時代、長い迫害時代をへて明治末期の名訳といわれたラゲ訳などの文語訳、そしてバルバロ訳から現代の共同訳まで、カトリックに限っても収集の困難さは理解に難くないであろう。

2. 教義書、護教書

旧約時代はさて置き、新約にはいつてからのカトリック教義書は、各時代を通して数多く出版されている。聖アウグスチノを始め数多くの著者の著作が時代と場所を超えて存在し、また教会史を学ぶと、異端といわれる聖書と教義の誤った解釈への反論書と、護教書を見ることであろう。各時代の公会議文書もその代表と言ってよいであろう。

近代になって聖カニジオの書いた公教要理は長く信徒養成に使われたが、ヴァチカン公会議以後は 長く決定版が出なかったが、今年になってラテン語原文が出来た。まだ日本語の完訳が出ていないのは残念である。

3. 神学書

「大海をスプーンで測るような」と形容されても、人間の創造主である神の探求は終わる事がない。キリスト教神学は、1世紀から今日に至るまで人間理性の発達と共に連綿と絶える事無く続けられ、その代表的な人物を挙げれば聖トマス・アクィナスであろう。その他にも無数の神学者が、時代とともに時に悪戦苦闘し、時に善戦しながら神の業と人間営為の意味付けに労苦した跡を辿る事は、神学各分野の著作でよく見て取れるであろう。

(とにかくこの前記3分野は、本学に神学科があり、かなりの蓄積も神言神学院図書館に在ると思われるので、無理な努力の必要が無いのは幸いである)。

4. 教会歴史書

初期キリスト教徒のイスラエル離散から、ローマ帝国の範囲を超えて発展した教会の歴史は、国、民族、地域の差はあれ、概ね迫害から始まったと言ってよい。数え切れない殉教者の血の跡で各地の教会が発展し、衰微していった歴史は、書き残されたものが少ないが、それでも時代と地域と民族や国ごとに数えれば、これまた気の遠くなるような数になるのである

う。我が国のものは特に収集を希望する。

5. 聖人伝、伝記、信心書

聖マリアから12人の使徒達に始まって、現代のマザー・テレサに至るまで、全世界の各民族の中に、英雄的な信仰生活を送った人達は沢山知られている。

ある方は10代前半で純潔を守るために殉教し、ある方は生涯にわたって英雄的な忍耐を持って生涯を宣教活動に従事し、ある者は一生涯修道院で祈りと犠牲を世の人たちに代わって神に捧げ、ある者は自分を離れて病人看護や福祉活動に生涯を費やした。しかしその成し遂げた業よりもその信仰に裏付けられた人格の完成に、教会は聖人、福者の称号を与えて信徒の模範として顕彰している。この分野は、まだかなりの未知の著作が収集可能であろう。

6. 典礼書、聖歌集など

ミサ典礼が現在のように様式が定まった年代は、ハッキリしている。1964年の第二ヴァチカン公会議後に大改革が行われ、用語がラテン語から各国語になり、祭壇を向いていた司祭が信徒と対面するようになり、典礼文も大きく簡略化された。

従って従来まで全世界で統一的使用されていたラテン語典礼文書は不要となり、廃棄処分されたものが大量にのぼった。最初に言った「遅かった」の原因である。また、その他の典礼（聖体降福式や各種の信心行事、行列）などもあまり行われなくなり、その典礼文書も散逸しつつある。

加えて、典礼に使用される歌、ラテン語聖歌やその他の聖歌集（余談であるが、カトリック聖歌集の中に、本学教授故山本直忠氏作曲の聖歌や、本学職員作詞の聖歌も収録されている）なども新しくなり、古い形式のものは、処分されたか、埃をかぶって忘れられているかである。しかしこの分野こそ、逆にいえば絶好の収集チャンスであり、努力のし甲斐のある分野であろう。聖体讃歌、聖母讃歌をはじめ珠玉のような名曲が数々あり、モーツァルトが「全作品と交換してもその作曲者でありたい」と願ったと言われるミサ序唱や、グレゴリオ聖歌のほとんど、加えてロマン派の作者たちの多くのミサ曲などが挙げられる。皮肉なことに教会内で歌われなくて演奏会やTV、ラジオ、CDなどで多く取り上げられているものもあるが、演奏されることの少ない純粹讃美歌などにも素晴らしい先人達の遺産が残されており、その多くが「読み人知らず」であることも尚更今のうちに集めておかねば、と思うのは望蜀の感と言われるのでしょうか？

7. 文学、詩など

言うまでも無く、この分野は膨大である。いわゆるカトリック作家と呼ばれる人たちだけでも、日本では少ないが世界では数えきれない。カトリックやキリスト教を題材にしたノンカトリックの作家たちを加えれば、気が遠くなる数量であろう。

とすれば、ジャンルか年代か等々分野を限って収集するほうが特徴を鮮明にする意味からは良いかもしれない。

8. 終わりに

以上、取り止めもなく頭に浮かぶままに書いたが、専門家の皆様からみれば多くの誤りと反論もあるか、と思われる。お叱りは喜んで受け、文中ご迷惑をおかけした点は心からお詫び申しあげるが、カトリック文書の収集は、困難の大きな分野であると共に、それなら一層カトリック大学としてやり甲斐のある分野でもあると思考する。以上の各分野について、せめて我が国にて発行されたものに限っても、機会を捉えて粘り強く収集することが必要であろう。図書館の皆様の健闘と各位のご理解ご協力を切にお願いするものである。

(Isao YAMAMOTO : 前南山学園事務局長)

カトリック大学連盟図書館協議会 997年度実務研究会に参加して

伊藤敦子

10月30日(木)、曇天の肌寒さを感じさせる京都で、カトリック大学連盟図書館協議会1997年度実務研究会が開催された。業務増加の問題解決の手段としての業務の省力化・合理化について事例報告・意見交換が行われた後、昼食を挟んで講演、休憩後、ノートルダム女子大学図書館の見学が行われた。ここでは講演の要旨を以って報告と代えたい。

「キリスト教美術図書について」

講演者：ノートルダム女子大学生生活文化学科 五十嵐節子教授

ヨーロッパの歴史はカール大帝のローマ帝国皇帝の戴冠をもって始まったと言える。それはまたキリスト教美術の歴史の上でも新しい時代の幕開けであった。カール大帝を輩出したフランク族は装身具に対しては優れた造形技術を擁していたが、移動民族であったために、それまで彫刻・壁画などmonumentalなものは持たないできた。しかし、カール大帝はキリスト教帝国の拡充のため視覚メディアを多用し布教に役立てようとした。そのためには従来の装身具を中心とする二次元の美術だけでは不十分で、地中海の三次元の美術を利用したいと考えた。丁度その頃ビザンティンでは教会が偶像崇拜を厳しく禁じたために(イコノクラスム)、画工達が多数迫害されていた。そこでカール大帝は学僧を集めて宮廷学校を建設すると共にそこに工房を付設し、件の画工達を呼び集め写本を作らせた。但しここでも偶像崇拜を忌避したために彫刻的なものは象牙浮き彫りだけに留まった。しかも図像そのものを拝むのではなくそれによって信仰心をinspireされるものを作ったのであり、宗教的・神秘的な空間や現実空間の再現は行わなかった。

歴代皇帝は宝石・七宝を象嵌し金や銀をあしらった高価・豪華な福音書を次々作らせたが、それは幾何学的秩序の中にキリストを配し、脱物質感・脱物体感を目指したものであった。また、福音史家をその象徴である活物(マタイは天使、マルコはライオン、ルカは牛、ヨハネは鷲)と共に表すのも大きな特徴の一つであった。

時代を経るに従い、また教皇との権力構図が変わるに従い、聖書は装飾的なものから現実的なものへと変化を遂げる一方で別の側面を持つようになる。即ちカロリング朝初期は皇帝の後ろ盾によって教会が布教に励み、皇帝も教皇によって精神的な支えを得ていたが、教皇と皇帝の権力が拮抗し地上の権力を巡る綱引きが行われるようになると聖書にはどちらがより神の祝福を得ているかが描かれるようになった。皇帝に天上の神の右手から恩寵が注がれ、キリストが王冠を与え、天使が祝福を与え、玉座は天にあるというように、聖書の中で皇帝が神格化されていったのである。またホステリアを手にしたキリストなども現れキリストの人性即ち受難を思い起こさせる絵が出現してきた。その一方でキリストや聖母マリアの手が大きく描かれるなど解剖学的な正しさよりそのものの持つ力の強さ・大きさなども追求された。(Atsuko ITO: 図書館事務課)

<カトリック関係資料 寄贈のお願い>

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動を知るために、関係資料の散逸、毀損を防ぎかつ広く研究者などへの利用を図ることを目的とし、「カトリック文庫」を1993年より設置し、下記の資料を収集しております。

- * 教会刊行物(教会史誌・教会報 その他)
- * 明治、大正、昭和初期のキリスト教関係出版物
(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書 およびそれらの解説書、雑誌・新聞・布教資料・その他)
- * 修道会史・教会史 および関係刊行物・資料
- * 日本への布教に関する外国側資料
- * その他

つきましては皆様方から資料の寄贈を賜りたく、ここにお願ひ申し上げます。

なお、資料は選書の上、本学図書館の蔵書として所蔵させていただくこととなりますのでご了承ください。

問合せ先：南山大学図書館「カトリック文庫」〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library@ic.nanzan-u.ac.jp TEL:052-832-3163 FAX:052-833-6986 担当者:山辺

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第9号 1998.1.1発行 南山大学図書館「カトリック文庫」編集部:三浦基,尾形裕司